

(九) 現御神 あきつみかみ

高市の葬儀が一段落したところで、菟野は主だった廷臣を廟堂に集めた。

口火を切ったのは右大臣丹治比嶋。たじひのしま

「先に草壁皇子様がお隠れになり、今また高市皇子様がお亡くなりになった。今度はどなたを日継にお立てすればよいか、ご一同のお考えを伺いたい。」
嶋はゆっくりと一同を見回す。皆それぞれに思うところはあつたのだが、すぐには口に出さない。腹の探り合いである。

「忍壁皇子様のお考えは。」

今となつては先の大王の皇子の中では、忍壁が一番の年長である。もつとも忍壁の母は身分が低いので自他共に忍壁が日継になるとは思つてもいない。

「いや、私は日頃から書に埋もれて暮らしておりますのでな、このような席はとんど。」

うまく逃げた。

「古書ではこのような時、日継はどのように書かれておりましたよな。」

声をかけたのは穂積皇子である。年齢から見ても権利はある。母の身分も決して悪くはない。穂積としてはできれば忍壁の口から自分の名を言わせたい。が、忍壁はその手には乗らない。

「さあ。その時その時で特に決まりはないようすな。」

忍壁は、黙つて眼を閉じている。菟野の威圧を感じている。

「恐れながら、」

立ち上がったのは石上麻呂である。いそのかみのまろ

「草壁皇子様がご健在ならば、当然、軽皇子様が立たれたことと存じます。」

異議を唱えたのは磯城皇子である。しきのみこ

「しかし、草壁皇子は即位しておられぬ。現に先の大王の皇子が大勢おられるのを差し置いて、三世の王が立たれるのは如何なものか。それに、軽皇子はまだお若い。」

弟磯城の口の軽さに、忍壁は眉を潜めて菟野の顔を伺つた。麻呂は反論する。

「ご存知のように軽皇子様は先年より皇子の列に加わられました。これは大王様のご意向と伺っております。」

皆一様に菟野を見た。菟野は表情を変えない。それでも磯城は更に言葉を続ける。

「先の大王は吉野の宮で、多くの皇子たちを同じように慈しもうと誓いを立てられました。大王もまた、同じく誓われたと伺っております。大王のお子とは言え、亡くなられた草壁皇子のお血筋のみを特別になさつては、あの時

の誓いにそむくことになりましょう。とすれば、先の大王の皇子で妃腹の皇子は長皇子、弓削皇子、舎人皇子のお三方。中で年長となると長皇子ということになります。」

ようやく舎人の名が出て、大納言阿倍御主人あべのみうしの顔がほころぶ。舎人の祖母は阿倍氏の出である。

「いや、同じようにということになれば妃腹にこだわることもありませぬ。夫人腹とは言え穂積皇子は大王と同じ蘇我氏の出。皇子たちの中でも年長であられます。」

「先の大王の皇子は大勢おられますが、大王のお血筋は軽皇子お一人です。」

「いや、女王がおられる。」

「太后ならともかく、女王というだけで大王になられた例はない。」

「いや、氷高女王は弓削皇子のご内室であられる。ここはひとまず弓削皇子が立たれば大王のお血筋にもつながりましょう。これは亡くなられた高市皇子様のお考えでもございました。」

議論は紛糾かどのおおきみした。葛野王の胸は早鐘のように鳴り続けていた。先程から葛野は下手の席から時々送られてくる冷たい視線に身体を強張らせている。丸顔の穏やかな笑顔の奥にこれほど威圧的な力を秘めていようとは。言わねばならぬ。生き残るためには言わねばならぬ。しかし、それは葛野にとつて耐え難い屈辱くつじやくであった。父を殺した菟野うのに媚こびを売る姿は、想像するだにおぞましかった。

下手の視線に追い立てられるように、葛野は立ち上がった。足が震えた。それでも一歩進み出ると恭しく礼をした。

「わが国の法のりを顧かえりみまするに、」

一同の視線が一身に集まるのを感じて、声がうわずった。

「神代の昔から、子孫が相次いで天位を継いでまいりました。もし兄弟が後を継ぐようなことがあれば世の中は乱れます。乱れた揚句どのようなことになるか。その生証人いきしようじんが申し上げるのです。」

この一言で議場は静まり返った。もし壬申の乱が起きなかつたら、近江朝の大友大王の嫡子であるこの葛野が大王になっていたことだろう。

「人臣の身で天の御心を推し測ることができましようや。御心は既に決まっていますはずです。我々が議論するまでもないことです。」

その時、弓削が立ち上がろうとした。途端に葛野が声を張り上げる。

「まだおわかりにならないのか。」

葛野を睨み付けた弓削は、次の瞬間菟野の視線を感じて口をつぐんだ。

沈黙が続いた。

「他にご意見はございませんかな。」

鳴がしわがれ声を張り上げた。

「では、軽皇子様を日継とすることに、ご異議ありませんな。」

（大王様は、軽まで殺すおつもりか。）

予想はしていたものの、軽の立太子が現実のものとなると、阿閉の嘆きは怒りに変わろうとしている。いくらおとなしい阿閉でも、息子の命のためには黙っていられない。

「戦ったこともないそなたに何がわかります。勝たねば殺されるのです。これは大王家に生まれた者の宿命です。そなたにも、いつかわかる時がくるでしょう。」

阿閉の抗議など、菟野は気にも留めない。不比等さえいけば菟野の意志は次々と達成していくはずである。

日継が決まると、その功を賞して葛野が式部卿しきぶきやうに拔擢はつていされた。更に丹治

比嶋には百二十人の資人とねりが与えられた。大納言阿倍御主人と大伴御行には八十人。石上麻呂と藤原不比等にも五十人が与えられた。大友の側近だった石上麻呂がいつの間にか安麻呂を四階級も飛び越えて直広一になり、鎌足の息子不比等までもが安麻呂を二階級飛び越えて直広二になっている。

鎌足は常陸国で生まれたらしいが先祖が何者かを知るものはいない。鎌足の母は安麻呂の伯母とされているが、安麻呂は伯母なる人に会ったこともない。

「軽皇子を推したのは石上麻呂だ。不比等は一言もしやべらなかつた。それなのにどうして不比等に資人があたるのだ。」

安麻呂のイライラは募るばかりである。酒を飲んで愚痴ることが多くなつた。相手はもちろん旅人である。

「きつと裏で根回しをしたのでしようよ。でも資人は伯父上も頂いたのですからよいではありませんか。」

「いや、兄者はおとなしいから何も言われぬ。御主人殿みうしも事なかれで、麻呂や不比等の言いなりだ。大体、あの不比等という字が気に入らぬ。」

鎌足は大友に肩入れしていたが、幸か不幸か壬申の乱の前に他界した。おかげで負け戦にもかかわらず不比等は災いを免れた。それでも世間を憚って、三十過ぎまで出仕もせず、ひたすら学問に専念してきた。もともとの「史」という名はそんな彼にふさわしかった。

ところが今では「不比等」と書いている。

「不遜である。」

安麻呂はいきり立つ。

「全く、高市麻呂のように骨のあるやつが辞めてしまつて、大王は近江朝の連中の言いなりだ。」

三輪山の祭祀を掌る三輪高市麻呂が、菟野の伊勢行幸に反対して諫言辞職してから、もう五年がたっている。

「でも、不比等殿は評判がいいですよ。あれだけ大王の信任が篤いのに少しも傲慢なところがない。あたりが柔らかくて人の面倒をよく見る。後宮の女官で悪く言うものはおりません。大王が信任なさるのも無理はありません。それに、悔しいが連中は良く学んでいますよ。実に唐の律令に詳しい。私にはとても歯が立ちません。連中は律令を楯に、我々の武力を取り上げてしまつた。武力を持たない大伴氏に、存在意義などありません。敵ながら天晴れというほかありませんな。」

「感心している場合か。手立てを考へろ、手立てを。律令などと訳のわからんものを持ち出して、結局、我々の土地と民を巻き上げおつた。」

「位が上がりぬ、追いつ越されたと言つて怒るのも、連中の術中に落ちたようなものではありませんか。私には連中は父上が怒つて何かしでかすのを待っているような気がしてなりません。」

「何も言うな、というわけか。うゝん。不比等め。嫌な奴だ。藤は大木に絡み付いて上へ伸びる。大木の精気を吸い取つて大木を枯らし、己だけが蔓延るのだ。不比等は藤の性そのものだ。大王も今にきつと後悔なさるだろう。」

「その時こそ、我が大伴の出番です。その時に備えて、今は力を蓄えておかねばなりません。」

「そうだ。そのためには先ず、跡継ぎを作れ。三十三にもなつてまだ子がな」とはだらしがない。正室が怖くて他の女に手が出せぬのか。」

「そう言う安麻呂は、この歳になつてもまだ三人の妻の許に通っている。」

「そんなことはありません。気に入つた女がいなだけです。」

慌てて首を振ると、旅人は一気に杯を飲み干した。妻の大伴郎女は伯父御行の娘である。美しく優しく慎ましいだけでなく、聡明で細やかな情緒を漂

わせた妻に、旅人は生き別れになつた母の面影を見ているのかもしれない。「一族の中だけに籠つていてはだめだ。他氏からもたくさん妻をもらえ。大伴の地盤を固めるにはそれが一番手っ取り早い。不比等を見ろ。見掛けはた

いたしたことはないが、精力は絶倫と見えて、あちこちで子を生ませている。嫌な奴だが、男はああでなくては。」

通い婚かよこんの時代である。もちろん男が女の許へ通う。だが時には女が抜け出してきて会うこともある。逢引あひびきである。

今宵も一人の女が寺に籠っている。何を祈っているのだろうか。着飾ってはいるが、肉付きの良いその顔はもう若くはない。宵よじの読経よきょうが終わると女は僧坊の一室に引き上げた。長い回廊を渡るその後姿が心なしか浮き浮きと踊っているように見える。

侍女を下げて一人入った部屋の奥に、黒い人影が揺れる。燭台の向こうから手招きする男の懐に重い体を預けると、男はたまたらず後に倒れた。笑いながら男が灯を吹き消す。麝香じやこうであろうか、妖あやしげな香の匂いが部屋中に満ち満ちている。暗闇の中で抱き合う男女。衣ずれの音。肌のすれ合う音。女は身悶えしながら態を変え、なされるままに身を開く。闇の中に肌と肌のねつとりと打ち合う音。男の口づけが女の喘ぎに蓋をする。やがて。

「ああっ。」
感極まった女の声。

男は黙って女の口に己を押し付ける。脂ののった白い肌が闇に浮き上がった、男に吸い付いてくる。

「うん。いい。そうだ。もっと強く吸って。いいぞ。」
「いや。そこはもっと軽く。舌の先で転がすように。」
「軽く。軽く。噛むんだ。ああ。いい。」

長い愛撫の時が続く。

「ああ。もう。たまらん。」

男はいきなり態を変えると、身を重ねた。

やがて体を起こした男は、その丸い顔に人なつっこい笑みを浮かべて、女の脂の乗った滑らかな肌を撫で回す。

「うまいものだ。その技を、しっかりあの娘こに教えて下されよ。」

女の顔にも満ち足りた笑みが浮かんでいる。

「お任せ下さい。必ずあのお方のみ心を捉えてお見せしましょう。」

「頼みましたぞ。だがその前に。邪魔者には消えてもらった方がよい。」

闇の中から魔の手が伸びる。

(何だ。これは。)

空っぽになった弓削の頭は混乱した。目の前に大輪の百合のような華やかな

微笑があった。

(こいつ、何だって笑ったのだ。)

この時初めて、弓削はこの妹に女を感じた。

(それにしてもいい女だ。今までどうして気がつかなかったのだろう。軽み
たいな子供の相手をさせておくのはもったいないな。)

日継を決める御前会議で黙らせられた弓削は、毎日鬱々としていた。全て
が空しかった。浄御原の頃が懐かしかった。父の時代が遠くへ行ってしまう
て、いくら踏ん張っても弓削の力では引き戻すことができない。無力感の中
を漂っていた時、からかうように投げられたその笑みが、虚ろになった弓削
の心を捉えた。母が違えば姉妹と結婚することもできた時代である。

(この女を抱きたいものだ。この女を抱いたら、軽の奴どんな顔をするだろ
うな。)

軽の狼狽ぶりを想像するだけでワクワクした。妄想が妄想を呼んで、女盛
りの紀皇女の艶やかな裸体が弓削の体に絡み付く。弓削は喘いだ。自分を押
さえつけようとする権力の裏をかく恋。スリルに満ちた恋の魅力に、弓削は
我を忘れた。無力感を吹き払うかのように、弓削はこの危険な恋にのめり込
んで行く。だが軽の妃であるこの妹にどうして近づくことができよう。叶わ
ぬことと思えば思うほど、弓削の恋心は募っていく。

思い余って歌を贈った。側近の日向王の妻がたまたま紀に仕えていた。

秋萩の上に置きたる白露の

消かも死なまし恋ひつつあらずは (1608)

恐る恐る贈った歌は、思いの他すんなりと紀の手元に届いたようである。
紀は退屈していた。結婚したといっても形ばかりで、相手はまだ子供みた
いなものである。日がな一日遊んで暮らしても秋の夜はなかなかふけない。
弓削の恋歌は格好の退屈しのぎになった。紀が歌を拒まなかったことは、弓
削にかすかな期待を抱かせた。だが、紀からの返事はない。后位を目前にし
た紀がおいそれと弓削の誘いに乗るはずもない。

我妹児に恋ひつつあらずは

秋萩の咲きて散りぬる花にあらましを (120)

弓削は恋をすることで虚しさから逃げようとしているようにも見えた。

年が明けると軽の立太子の儀が執り行われた。華やいだ空気の中で、春は過ぎて行く。夏四月、久し振りに菟野が吉野に出かけると宮中はようやく静けさを取り戻した。

初夏だと言うのに暑い日が続いている。梅雨にはまだ間があるようで、一向に雨が降らない。真夏を思わせる太陽が乾いた大地を照らしつける。飛鳥に残った氷高は、毎日のように阿閉の顔を見にやって来る。阿閉としては、この娘が一向に身ごもらないことが気にかかる。

「そなた、皇子とはうまくいっているのですか。」

「ええ、もちろんですわ、お母様。皇子様はとても優しくして下さいますわ。」
氷高は明るく答える。

「そう、それならいいけれど。でも、もう四年になりますよ。」

「子供のこと。だって、私、まだ子供みたいなものなんですもの。お母様が私をお生みになったのはおいくつでした。」

「さあ。二十歳の時でしたかしら。」

「そら御覧なさいませ。私だってそのうちお子が授かりますわ。」

「でも、私の時は、お父様がお弱かったから。」

「それでも三人も授かったではありませんか。」

無理に笑顔を作ろうとする娘のけなげさに胸が痛む。

「でも、この頃、元気がないみたいで。」

「それはそうですわ。あの会議の席で皇子様が軽の立太子に反対しようとなさったのでしょう。おばあ様に睨まれてしまったのですって。皇子様は世の中が変わってしまったって、とても塞ぎ込んでいらっしゃるの。おじい様のいらっしゃった頃が懐かしいって、嘆いていらっしゃるのですわ。」

弓削が塞ぎ込んでいるのはそれだけではないことを、氷高は百も承知している。弓削が恋をしていることぐらい氷高にだってわかる。わかっている。わかってはいても夫の恋に心を乱されるなど、氷高の自尊心が許さない。弓削にすれば聡明で美しい氷高は気に入っている。だが氷高は軽の皇子昇格と引き換えに大王から与えられた代償である。粗略に扱うことのできない、厄介な存在でもある。弓削はまだ氷高に心を許してはいない。

その弓削は、菟野の行幸に従駕して吉野にいる。吉野の山奥でもいったん取り付いた紀の艶やかな微笑みは弓削の頭から離れようとはしない。

吉野川逝く瀬の早みしましくも

弓削は自分自身がこの瀬を逝く水のように奈落の底へ落ちようとしていることに気づいていない。

吉野から戻ると、暑さがこたえたのであろうか、菟野は、珍しく床に就いた。恩赦をし、神々に祈り、寺々で経も読ませた。仏像を造らせて薬師寺で開眼供養もした。それでも病は一向によくならない。菟野は五十三歳になっていた。

「このまま死ぬわけにはいかない。」

八月一日。病の床で突然菟野は讓位して、即日軽が即位した。生前讓位は三人目だが武力を伴わないのはこれが初めてである。天照大神から邇邇藝へ。

祖母から孫へ。草壁の死後、繰り返し読み上げられてきた『天神賀詞』は、ここに遂に現実のものとなった。わずか十五歳の大王の誕生である。

この日、大宮の前に廷臣たちが集められ、即位の詔が発せられた。

「現御神と大八嶋国知ろしめす天皇大命らまと詔ふ大命を・・・高天原に事始めて遠天皇祖の御世御世中今に至までに天皇御子の阿礼まさむ、いや

継ぎ継ぎに大八嶋国知らさむ次々と天つ神の御子ながらも天にます神の依

さし奉りしままに・・・」

軽もまた現人神となった。

軽の即位に伴う人事異動で、佐留は官職を解かれた。佐留も五十の坂を越えた。もう出仕する必要もない。好きな歌だけを詠んで暮らせる。そう思うだけで心が浮き立つのを覚えた。穏やかな飛鳥の山川は、宮中の権力争いに疲れた詩人の心を、少しずつ癒していった。中でも軽の市で出会った若い乙女の優しさに、佐留の心は慰められた。何時しかその広売に会うために市に通う佐留であった。

海を見たことがないと言う広売のために、一緒に紀伊の海に行ったこともある。宇智の大野から吉野川に出て、そのまま下って行くと紀ノ川に入る。やがて川を挟んで向かい合う可愛い小山。

「そら。右手の高い方が背の山。左手の低い方が妹山だ。」

「まあ。あれが妹背の山。」

広売の目が生き生きと輝く。やがて高い澄んだ声で歌い出した。

おほなむち
大穴道少御神の作らしし

妹背の山を見らくしよしも

(1247)

「よく覚えていたな。古い歌なのに。」

「あなたが作ったものではありませんの。よく聞きましたよ。」

高名な歌人と共にいる幸せに、若い広売は誇らしげに応える。長らく天照大神を歌ってきた歌人も、もともと国を造った神は大女神と信じている。

更に下ると、前方に何か白い物が見えてくる。

「あれは何。」

「何だと思う。」

広売の驚きが、佐留には楽しい。

「あれが波。」

「そう。あれが波。」

「ああ。あれが海なのね。」

「そう。あれが海だ。」

二人は顔を見合わせて笑った。これが幸せというものか。権力とは縁もゆかりもない乙女笑顔に、佐留の心は満ち足りた思いに包まれていく。

和歌浦の砂浜に降り立つと、広売は腕を広げて大きく息を吸い込んだ。潮の匂いが胸いっぱい広がる。裸足になって、広売は波打ち際に走った。ドドッと押し寄せる波の音。寄せては砕け、サーと返す、波。波。波。足元の砂が波と一緒に引いて行く。

「足の裏がくすぐったい。」

広売のみずみずしい感性が、詩人の乾いた心を潤していく。

薬師寺の北の真新しい小さな宮殿。庭で虫が鳴いている。床の上で耳を澄ます。

「あれは何という虫であろうか。」

長い間走り続けてきた。虫の音に耳を傾けるなど、菟野にはかつてないことだった。

譲位して肩の荷が下りたからか、涼しくなったからか、それともともと計画的な病だったのか。ともあれ菟野の病は薄紙うすがみを剥はぐように快方に向かった。譲位して神である必要がなくなったのであろうか。菟野の吉野行幸も途絶えた。以後の菟野は薬師寺の造宮に没頭することになる。

金堂の裏には密かに大津の坐像が納められている。阿閉には大津のために寺を造ると言ったが、寺を造れば自分の非を認めることになってしまう。これが浄御原大王のための寺なら何ら憚ることはない。大津の像の前で、菟野は何を祈っているのであろうか。